

## コメントを補う —新聞寄稿のことなど—

寺崎 昌男

全カリ運営センター・シンポジウムの来会者の一人に、読売新聞編集委員・中西茂氏がおられ、のちに自校教育について執筆してほしいと依頼されたので、喜んで書かせてもらった。その紹介を含め、コメントに若干のことを補わせていただきたい。

氏と知り合ったのは、シンポジウムの2か月前、2008年12月10日に読売新聞社が開いた「第7回大学中部地区懇談会」であった。対談相手は立命館大学副学長・本間政雄氏で、司会者が中西氏だった。

筆者は、講演「教職員の教育力をいかに高めるか」を行った。

「大学は厳しい二極化の時代を迎え、学生の多様化もますます激しい。それだけに、学生の実態に対応した指導が求められている。それだけでなく、政策的には、『グローバル水準』という名の質向上も求められている。このような状況のもとで、大学は、周章狼狽するのではなく、学生の利益にかなうことを主眼に据え、方法改善とカリキュラム創造に力を傾けることが大切だと思う。授業についても、教員が学生に知識を授けるという授業ではなく、学生とともに考え導くような方法を考えるべきであろう」。

そして学生たちの学習姿勢とからめて「自校教育」の重要性に論及した。それが中西氏の関心を引き、太刀川記念館での再会となったわけである。ちなみに、上記の懇談会には中部地区諸大学の学長・学部長・職員たち80名余りが集まった。議論の詳細は、2008

年12月11日および26日の読売新聞中部版に報じられている。

「大学教育の在り方を学生の目線に立って考え直してみよう」

この機運が、次第に高まってきたように思う。大学はますます多様化し、また深刻な多層化(?)を迎えた。職員と学生という重要な構成員を再発見し、新しいエネルギーとして期待して行くというのは、ある意味で必然の視点であり、同時に貴重な発見である。10年前に全学共通カリキュラムを立ち上げた立教大学は、もともと学生の存在を大切にしていって大学だった。現下の新しい状況のもとで、その校風はますます貴重なものになって行くに違いない。

もう一つ付け加えると、2008年8月末に、高等教育研究の専門団体であるIDE大学協会近畿支部が「自校教育の行方—愛校心なき大学を憂う」と題するシンポジウムを京都で開催した。筆者は京都産業大学・一橋大学の代表の方たちとともに報告したのだが、「愛校心」問題について、京都産業大学の方とかなり意見を異にした。

本シンポジウムのコメントや下記の転載論文で「自校教育は果たして愛校心育成のための教育か」という論点にこだわったのは、京都シンポジウムでの議論を引き継いだからである。京都での討論については『IDE現代の高等教育(2008年12月号)』に報告記事が載っている。興味のある方はバックナンバーを閲覧して下さい幸いです。

以下、次頁に筆者の投稿論文を転載

させていただく。急遽書いたため、例えば岩手大学の大川一毅先生の紹介された数値の記述など正確でない部分があるが、原文のままに採録した。

てらさき まさお  
(立教学院本部調査役・本学大学教育  
開発・支援センター顧問)

## 【論説再掲（読売新聞〈論点〉）】

### 広がる自校教育 一大学史通じ「居場所」探し

寺崎 昌男

(立教学院本部調査役・大学教育学会会長)

「自校教育」という試みがある。大学生に「自分のいる大学はどういう特色を持っているか」「建学の精神は何か。これまでどういう歴史をたどってきたか」「卒業生はどんな活躍をしているか」などを教えることである。

10年前までは、「そんなことは分かった上で志願してきたはずだ」「学長が入学式で話せばよい」とみな思っていた。だが学生たちは、自分の入った大学について何も知らないらしいと分かってきて、徐々に広がってきた。

例えば、北海道大学、専修大学、一橋大学で今年度から自校史の授業が始まった。一橋大学では、同窓会が発意した。岩手大学の岩手大川一毅准教授による今年度の調査では、「現代社会と大学」「〇〇大学とは何か」など、様々な名前前で授業を開設している大学が60校近くにのぼる。ガイダンスなども含めると約200校が、何らかの自校教育を行っている。

「大学が志願者を選ぶ時代は終わった。選ばれる時代だ」といわれる。だが「選んできた」はずの受験者の側の持つ情報は極めて乏しい。入学者の本音を聞くと、難関大学であればあるほど「もっと上の大学に入りたかったのに」という不本意入学者が少なくない。

また、事実上の大学全入時代を迎えて、「自分はなぜここにいるのか」が分からないまま、偶然に教室に座っている大学生はたくさんいる。

こうした実態を乗り越えて「自分はどこにいるのか」をわかってもらわないと、4年間の積極的な学習は成り立たない。ブランドやランキングによってではなく、いわば「固有名詞としての大学」を選び取ってもらいたいのである。

立教大学は1月末、九州、広島、京都、名古屋、東北、明治の各大学の関係者を招いたシンポジウム「自校教育・その到達点と課題」を開催したが、聴講者の学校数は51校にのぼった。「自校のことを学生に知ってもらいたい」という空気が、多くの大学に広がっている。その熱意は、大学の知名度や格とは関係ないらしい。

そもそも自校教育の目的は何か。「帰属感を生み出して愛校心を育成することだ。校歌さえ歌えない学生もいるではないか」という声がある。他方、自校教育は学生たちに自分の「居場所」を発見させ、それを通じて自己を発見させる機会になる。その意味で教養教育そのものだ、という見方もある。

また、充実した自校教育を行うには、自校の歴史がしっかり解明されていなければならない。そのことを重視すれば大学のアーカイブス（文書館）をベースにした近現代史教育ではないかという意見もある。

さらには、成績評価をどうするか、入学したばかりの時期がいいのか、2年次がいいのかといった実施時期の問題もある。

自校教育が、今強く求められている大学の個性を表明し、大学のアイデンティティー（存在理由）をはっきりさせ、それを教職員や学生、さらには同窓会も含めて共有してゆく作業であることは明らかだ。筆者は、自校教育を歴史を土台にした教養教育だと見る。

その方法や課題は今後の実践の蓄積と研究にかかっている。だがこの新しい試みが、高大連携や初年次教育の実現といった現下の大学教育改革の課題とも直結する実践であることは確かであろう。

「2009年2月18日 読売新聞 朝刊 11ページ」から転載